

声する訓練なので、受け身になってただ聞くだけに終わりがちなリスニング作業を、より能動的な作業に変え、発信型の学習に変換することが可能になる。発音からリスニング、リスニングからスピーキングへと導くことを容易にする学習方法と言える。

### 三 まとめにかえて

通訳訓練を通しての英語学習は、より根本的な部分で大きな可能性を持つ。

外国語を単に言葉としてとらえるのではなく、伝えられた内容を論理的に分析することは通訳を行なう上での必須条件であるが、これは多くの日本人学習者が不得意とすることのひとつである。通訳訓練を通してこの面を学ぶことは発信型コミュニケーションへの第一歩となる。

さらに、言葉に関する感性、異文化に対する感性を磨き、言語と文化への深い理解を培うことは、異文化コミュニケーションの基本である。一朝一夕には身につかないものであるが、これも、通訳訓練を通して皮膚感覚で理解することが可能になる。

多文化時代を生きるための英語教育において、通訳訓練の

果たし得る役割は大きい。

#### 【参考文献】

- 『アルト地球人ムーン』(1976)「通訳事典96」アルト  
Brown, H. D. (1994). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy*. Prentice Hall Regents.  
Brunftit, C. J. & Johnson, K. (1979). *The communicative approach to language teaching*. Oxford Univ. Press.  
Howatt, A. P. R. (1984). *A history of English language teaching*. Oxford Univ. Press.  
Dollerup, C. & Loddegaard, A. (1992). *Teaching translation and interpreting: Training, talent and experience*. John Benjamins.  
Littlewood, W. (1984). *Communicative language teaching*. Cambridge Univ. Press.  
Selekovitch, D. (1978). *Interpreting for international conferences*. Trans by S. Dailey & E. N. McMillan. Pen & Booth.  
田辺洋二 (1976) 『学校英語』筑摩書房  
田中懐也 (1976) 『ふくろく行へ』大学の外国語教育』三修社  
Widowson, H. G. (1978). *Teaching language as communication*. Oxford Univ. Press.  
Wilkins, D. A. (1976). *Notional syllabuses*. Oxford Univ. Press.  
(とりからくみこ)『英語教育学・日英通訳』

## 特集★通訳の科学



# 異文化間コミュニケーションにおける通訳者

異文化性という問題が、特定の文化の特殊性を強調し、両文化の差異を固定化するように

働くとするれば、そうした異文化性は通訳者にとって二次的な問題にすぎない。

しかし、通訳者がわかりやすく言い換えて異文化を感じさせなくすることが「正しい」通訳なのだろうか。

相澤啓一

### 一 「異文化」という用語の陥穽

通訳や翻訳を論ずるに際して「異文化理解」という視点からの問題設定が欠かせないというのは、ごく常識的な話であるかのようと思われる。例えば「ものあはれ」や「猫に小判」といった日本文化特有と思われる言い回しをプロの通訳がどんな華麗なテクニックで訳すのか、いかにも興味津々の話題が期待できそうである。しかし、そうした発想で通訳の役割を論じることは、果たして本当に異文化理解に寄与するであろうか？ そもそも通訳に関する問題を考える上で「異文化」

という視点を設定することがいかなる意味で必要なのかは、実は決して自明ではないのではなからうか。まずは「異文化」という用語について、改めて問い直しておく必要があるようである。

「異文化」という概念は、「異文化理解」、「異文化間コミュニケーション」といった形で、目下大いに流行している。その背景には、例えばそれ以前の流行語だった「国際交流」といった用語の限界が認識されてきたために「国」を「文化」に言い換えてきたという事情もあるだろう。しかし、「外国」を「異文化」と言い換えることによって、異質な文化や他者の存在に対する開かれた態度が根付いてきたと言えるのかどうかは大

いに疑問である。むしろ私たちは、ことさらに「異文化」という区別を持ち出すことによつて、ともすると自分自身の中に内化されている文化的伝統を無条件に前提し、コミュニケーション相手との間の文化的差異を予め固定してしまおうとはしていないだろうか。一方では例えばモーツァルトやミロのヴェーナスやトルストイを人類普遍の文化遺産などと称揚しておきながら、別の局面では突然「異文化」の視点を持ち出すのだとすれば、問題は明らかに主体の側の恣意的な選択行為にこそある。異文化間で本当に生産的なコミュニケーションが行われるときには、異文化はもはや異文化ではなくなつてしまふかもしれないし、そもそも「私」はそれ以前の「私」ではなくなつてしまつていくかもしれない！ そうなつた時こそが「異文化間コミュニケーション」の最も意義深い成功の瞬間であるかもしれないのに、ともすると私たちはまさに「異文化」という語で語り出すことによつて、せっかく出会う未知の対象に対して自らを閉ざし、特定の文化コードへの絶対服従を当然視し、何の変化も起こらなくさせようなどとしてはいないだろうか。このように、「異文化」を語ることが、せっかく可能にならなかつたカルチャー・ショックを慫慂に抑圧してしまふ自己防衛・秩序維持の構造を持つていたのだとしたら、通訳

という行為は、単純にそのような「異文化間コミュニケーション」の促進手段であるわけにはいかないのである。

さて、通訳とは明らかに「異言語間コミュニケーション」の一つの手段であるが、それを「異文化間コミュニケーション」と言い換えるとき、つまり「言語」を「文化」に置き換えるときに、そこで何が変わるのか、どのような問題がつけ加わるのか、話はそう簡単ではない。日本語を母語とする私たちが、ふだんから「母語」のことを平気で「母国語」と呼び、母語でない「異言語」のことを「外国語」という名称で言い習わしているのであるが、このような何気なしの「言語」と「文化」と「国家」の混同を続けることは、少なくとも「異文化」について論じようとするときには、もはや許されないだろう。無論ここは「文化とは何か」といった大問題を論ずる場ではないが、さし当たり一つの事実だけは確認しておきたい。すなわち、何らかのナショナルな文化を「実体」として考えたいというごく日常的・常識的な考え方はすぐに自己矛盾に突き当たらざるを得ない、という事実である。例えば大和魂やわび・さびをもつて日本文化の特徴としたり、勤勉と秩序愛をもつてドイツ文化の本質と見なすような、しばしば俗受けのする定義づけは、一見いかに説得力があるように見えても、必ず様々な反証に

遭遇せざるを得ない。つまり、「自文化」とされる内部からはその種の「定義」に反する様々な例外現象が噴出する一方で、「異文化」であるはずの地域や人々の間にもいくらでも類似現象が見出されてしまうのである。(ちなみに、文化をめぐるこうした論理構造は、何らかの科学的に実証可能な実体やメンタリティーに基づいて「日本人」や「ドイツ人」といったネーションを定義することが不可能であるのと同じである。) こうして見るとき、文化という概念は、何らかの基準に基づく実体概念としてではなく、あくまで相対的な関係概念として考えるべきものであることが分かる。すなわち、或る文化の存在は、その文化圏に属さない他者の存在があつて初めて意識化され、それら他文化と境界づけられることで初めて構想され、命名されるものである。しばしば実体的に捉えられがちな「わが国固有の文化」とか「民族の伝統」といった発想も、実はこうした、他者を意識化し境界づけによつて排除する経緯があつて初めて形成されない捏造されるものに過ぎないのであつて、例えば「日本文化」を論ずる視線も、周知のように、明治維新後の近代国家成立と表裏一体の形で初めて誕生してきたのであつた。

さてこのように、「文化」を相対的な関係概念として考える

とき、「異文化間コミュニケーション」ないし「異文化理解」とは「文化」の本質的構成要素とも言える自明の行為であつて、敢えて言うならそれらは「文化」という語の言い替え、いわばトートロジーに過ぎないとすら言い得ることが明らかとなる。そもそも完全に等質な文化の中では、コミュニケーションが必要かどうかすら疑わしい。逆に言えば、あらゆるコミュニケーションは、極端にいえば隣人とのおしやべりや恋人への愛の囁きですらも、原理的に異文化間コミュニケーションの一つと見なすことができるのである。むしろ実際には誰もそれらに「異文化間」などといった大袈裟な形容詞をつけて呼びはしないが、それは単に、「異文化間コミュニケーション」というと異言語間、いやもつぱら異なる国家の間でのコミュニケーションのことを指すよう了解する発想が、つまりは言語と文化とネーションを混同し、ないしは強引に同一視しようとするコードが、依然として存在しているからに過ぎない。ここにもはつきりと、文化という概念が十九世紀以来担わされているナショナルな含意の残滓が見取れるのである。

こうして見るとき、通訳を論ずる際に「文化」という概念を導入する際には、言語媒介に行われるべき議論の中

にそれとは無関係な要素、例えば閉鎖的な自文化中心主義やナシヨナリズムといった招かれざる要素が無意識の内に混入してしまふ危険に十分留意する必要があることが分かる。しかし他方、通訳者が単なる自動翻訳機と見なされ、A言語でメッセージがインプットされれば自動的に通訳者の口からB言語が訳され出てくるといった単なる「機能」としてイメージされる傾向が現実には依然として支配的である以上、通訳行為における「文化」的側面に光を当てたる作業が不可欠であるのも確かである。そうした反省に立ちながら、以下ここでは、通訳行為の単なる言語的媒介を超えた文化的意味と役割について、特に日独会議同時通訳に際しての日本側の文化的側面を例に取りながら、考察を加えてみることにしたい。

## 二 通訳者が克服すべき対象としての「異文化性」

常識的に考えても、日本とヨーロッパの間の文化的差異には確かに依然大きいものがあり、それらにまつわる通訳上の様々なエピソードや笑い話を拾い上げればきりががない。通訳立かせの特殊日本の表現、例えばわびやさび、粹や人情といった概念をどう処理するかから始まって、「よろしくお取りは

からいを」とか「前向きに善処します」といった言い回しの含意の問題、或いは会議であれば、例えば「私のような若輩者が思いがけずご指名を受けまして、何かからお話ししてよいやら困っておりますが「…」など、通訳たる者必ず何らかの対処の仕方を想定しておかなくてはならない特殊日本の表現は、確かに無数に存在する。こうした日欧の文化の違いを強調し、日本文化の特殊性を殊更に神話化しようとする議論は、既に無数の「日本人論」の中にパターン化されて定着しており、そうした文脈の中ではあたかも、文化とは異言語間コミュニケーションを妨げ、場合によっては不可能にするものだと印象すらある。実際、日本文化について「どうせ外人には分からないだろう」と決めつけたような態度で語られるケースが少なくないことも、日常的によく経験するところである。

にもかかわらず、実際にブースで仕事をする同時通訳者にとってこれらの問題が決定的な意味を持つかという点、実はそれ程ではないことが多い。とりわけ、会議の頻度も多い自然科学や技術関係、また経済関係の通訳の場合、そこで古典的な日本独自の文化性がネットワークになってコミュニケーションの障害になったり誤解が生じたりするケースはかなり稀でしかないと言えるだろう。同時通訳の場合、そうした文化的問題

よりももっと差し迫った課題、例えばその日のテーマの高度に専門的内容を素人である通訳者がどう理解するかとか、訳語の正確さをどう保つか、突然出てくる諺や駄洒落や笑い話にどうオチをつけるか、数字をどうすれば間違えなく拾えるか、早口の発言者にどうすればついていけるか等々、極めて現実的かつ危急存亡の課題が山積していて、多くの場合とても「文化」どころではない。というわけで、異文化性と通訳行為をめぐる第一のテーゼとして、まず次の点を確認しておきたい。即ち、「異文化性」という視点が、特定の文化(例えば日本文化)の特殊性を強調し、日欧の差異を固定しようとするような文脈で語られる限り、通訳行為にとって異文化性の問題は二次的問題に過ぎない、ということである。

確かに、通訳する中で「日本独特の文化、またはヨーロッパ独特な現象についての知識のない聴衆には、きつと分かってももらえないだろう」と歯ぎしりするケースは数知れない。しかしそうした場合も最終的には次の三つやり方の何れかで対処することになる。即ち、第一には、何らかの世界標準的な言い方で言い換える、第二に、時間の許す限り多少の文化的背景説明を付け加える、そして第三に、これがいよいよなくなったときの奥の手であるが、無視して飛ばす、この何れか

である。ずいぶん乱暴なようではあるが、これで片づけられる程度であるという意味で、この文脈における「異文化性」の問題は、異言語間通訳者が克服すべき数多くの課題の単なる一つに過ぎないと言つてよい。「通訳」という作業は、困難ではならない「翻訳」の場合とは異なり、決して一〇〇%完璧な訳を目指す自己目的な営為ではあり得ない。むしろ通訳とは、まず既に予め対話の当事者が設定されていて、極めて具体的な対話の枠組みが出来上がっており、当事者間に何らかの情報交換の必要性や共同の関心、共通のテーマが存在しているときに初めて登場する、近代固有の職業なのである。早い話、同時通訳者を投入して行う会議において、欧米諸国からの参加者が期待する日本とは、もはや冒険家たちを魅了する未知の黄金の国ジバングでも、エキゾチックな芸者と富士山の国でもなく、先ず第一に共通の資本主義経済の枠組みのビジネス仲間、あるいは協同して世界秩序を構築するパートナーとしての日本でしかない。つまり通訳の場合、通訳を介在させての異言語間コミュニケーションが十分に機能するだけの共通理解、いわば「近代に特徴的な同質文化性」の存在が前提となつていたのであって、そこでは、独自固有の文化を神秘化

したり文化の壁を絶対視する怪しげな文化観に基づいて、対話の不可能性や異文化理解の困難などを云々するため立ち止まっている暇はない。通訳者は、翻訳者とは対照的に、異文化間の懸隔などをものともせず、異言語間コミュニケーションにつきものの困難を当然のように軽々と乗り越えて、「何ともあれ理解を分かち合ってもらおうのだ」との意志をあくまで貫き先へと進むべき使命を担っているのである。

### 三 創造的な異文化間コミュニケーションに向けて

さて、ここから先の話は、先の第一テーゼを踏まえた上で、通訳者が異文化理解のために果たすべき課題という、更にその一歩先の理念的目標について考えてみようとするものである。ところで、通訳経験者であれば、例えば商談交渉の通訳の場で、互いに相手側の事情を知らないパートナー同志の間に挟まって、単なる通訳者としてのみならず、双方の事情を説明する仲介役を自ら買って出ざるを得なくなる場面を何度も経験していることだろう。無論いつも代理人気取りで話の内容に首を突っ込むようでは通訳者として失格である。だが、交渉当事者の双方が一方的に自分の事情ばかり主張して相手

の事情を理解できないとき、間に入って双方の事情を当人たちよりもっと上手に説明してあげるという役割は、賢く行えば、あなたが通訳者としての分際を逸脱した行為と決めつけることはできない。というのも、場合によっては両者の背景を知る通訳者だけが、互いに何が分からないために話がかみあわずにこじれてしまうのかを把握し、中立的に判断・仲介し得る立場にあるからである。同じことは、会議通訳の場合でも起こりうる。通訳者というものは普通、単に二カ国語以上が堪能だけでなく、たとえ雑学的にであれ、通訳する両言語の背景にある文化的・社会的文脈を極めて深く深く経験し、両者の間に横たわる文化的差異や異文化性を熟知している。そのように両文化を知る通訳者だからこそ、会議でのメッセージの本質的部分に関して、それが相手側に対してどう伝わるか、そしてとりわけ何が伝わらないであろうかを、多くの場合最も的確に予測・判断できるし、またそれが求められてもいるのである。(来日したドイツ人やフランス人に英語で講演させ英語通訳者に通訳させても良い結果をもたらさない場合が多いのはそのためである。)

ここで、「文化的差異」とか「異文化性」と言っているものが、先の第一のテーゼで触れた、見るからに特殊日本的だったりすぐれてドイツ的だったりする伝統的文化などと本質的に異なるものであることは、もはや言うまでもないだろう。むしろ逆に、ここでの「異文化性」とは、一見すると普遍的で、言葉で訳すと同じように見えてしまつて、それゆえ聴衆がとかく安心して聞いていられると考えるような部分にこそ潜んでいるような潜在的な文化的差異のことを言う。例えば「職業」という概念は、一見どこの国でもあてはまる普遍的概念であるように見えながら、ドイツではマイスター制度を中心とした熟練工養成制度を前提とし、日本では学歴社会や終身雇用制を前提としたイメージで捉えられることが多い。あるいはまた、まさに通訳の行なわれる現場である「会議」という概念自身が、日本では必ずしも、多様な意見の対立を前提としてあくまで対立を公に担つてゆく中で合意を形成する場として理解されるとは限らないわけで、日本側がしばしば企画するような、恙なく終了することを至上目的としてくれぐれもゲストに失礼のなきよう万全の配慮を怠らない儀式としての会議に初めて接する欧米側参加者の戸惑いやカルチャーショックこそは、会議の場において最も日本側に伝わりにくい部分だと言つてよい。

こうした会議の中にあつて、通訳者が単に黒子として忠実

な言語的仲介に徹するだけでなく、双方の自己理解をも変化させるほどの積極的で刺激的な文化的媒介者の役割を果たすべき場合も十分にあり得るだろう。場合によっては通訳者が、同じ一つ概念で示されることがらを敢えて腑分けし、翻訳言語の背景にある文化に合わせて特殊化し、適切な説明や留保を付け加えてゆくという作業を行う必要も生ずることだろう。もともと通訳という行為は本質的に、上手に訳せば訳すほど、分かりやすく言い換えるという作業をすることによって、聞き手を分かたつた気にさせ、異質なものとの出会いによるインパクトを薄める結果をもたらす性格を宿命的に持っている。そもそもわけの分からない外国語との出会いほどに大きなカルチャー・ショックもないわけで、通訳者の存在そのものがそのショックを大いに和らげ、異文化を安心できる日常風景に変えてくれる機能を、好むと好まざるに関わらず果たしてしまうのである。だとすれば、場合によっては余り「上手」な通訳でありすぎた方がいいということもあり得るのではなからうか。

こうした考えに基づいて次に挙げる第二のテーゼは、先に挙げた第一テーゼとは、一見すると矛盾するように響くかも知れない。即ち、通訳者は、異文化間コミュニケーションに

つきものの異質さを言い換えて理解しやすくしたり、聴衆にとって心地よい形に丸め込んで調和をもたらすのではなく、時にむしろ、たとえ理解しにくくなったり一時の不協和音を呼んだりしようとも、そうした異質さをありのまま、場合によっては不快なままの形で直接伝えるよう努めるべきである、というテーゼである。そのとき初めて通訳者は、単に異言語間だけでなく異文化間のコミュニケーションを成立させる文化的媒介者としての役割を積極的に果たすことにもなるであろう。

むしろこれは、場合によっては極めて危険な議論にもなり得るものであり、どこまでの範囲でそうした「操作」が許されるかは大いに議論の余地がある。そしてこれは、およそ通訳というものの技術がすべてそうであるように、恐らく最終的には通訳者個人の判断とその場の状況に委ねられざるを得ないのであろう。通訳者が勝手に話を捏造したり歪曲することが許されないのは当然としても、確かに一方では、通訳を通してのメッセージに「異文化を感じさせない」ことこそが通訳者の目指すべき究極目標であるとする立場も一定の説得力を持っているし、同様に「発言者の発言に通訳は責任をとり得ないのだから何があっても通訳は中立な黒子役に徹す

るべきだ」とする立場も、確かに十分に根拠があると言わざるを得ない。しかし、本来通訳が必要とされる場の多くは、単に知識を交換するのみならず、異質な発想そのものから互いに学びあい、新たな認識に至ることを目指すものであるはずである。その貴重な機会が、ひたすら調和的結論を目指す姿勢によって、実りのない単なる顔合わせの場に転落してしまわないためには、場合によっては、ただ忠実に議論を通訳するだけでなく、せっかくの異文化体験を聴衆があまりに安易に自分の日常的常識に引きつけて無害化してしまわないよう、ショックを与えつつ媒介し、異文化が衝突している見えにくい接点を炙り出すよう努めることも必要となるのではないかと思われるのである。

通訳を生業とする者は、異文化間コミュニケーションの成立にいかにかかわるべきか、日々決断を迫られていると言っても過言ではない。ときに通訳者は、信じられないような光景に遭遇する。例えば或る町の日独姉妹都市締結式典に呼ばれた通訳者は、ドイツからやってくる市長一行を歓迎すべく何の悪気もなくナチスのハーケンクロイツ旗を机に飾って歓迎する姿に仰天させられる。また別の日には、ヒトラー・ユングントに接して感激した昔話を得意気に話し続ける財界重鎮

のスピーチを訳す羽目になってドイツ側の前で絶句させられる。こうした場合に通訳者は、通訳としての分際をもわきまえずに日本側をたしなめてクライアントの叱責を買うべきなのか、それとも契約通り日本側の意を体し黒子に徹してドイツ側の響意を買うべきなのであろうか。或いはまた、天皇訪欧に際して、敬語も含めて完璧に日本語をマスターしたフランス人が非の打ち所のない日本語と礼節をもって天皇夫妻に随行したとき、それを驚嘆すべき見事な通訳として今後の範とすべきなのか、それともむしろ、それによって天皇にとつては貴重な異文化との接触の機会が失われたことを残念だと考えるべきか、判断は大きく分かれることだろう。これらの問いに絶対正しい模範解答はあり得ない。何れにせよこれらは、単に異言語通訳の問題にとどまらない、時に高度な政治的判断を伴う、異文化理解に関する苦渋の態度選択を個々の通訳者に迫るものであることだけは、確かなようである。

(あいざわけいいち/ドイツ文学・日独会議通訳)

『言語』前号(7月号)内容 [定価 860円]

* 特集・ことばのへ心身問題	今、言語の身体性を問う	菅原和孝
言語の身体モデルを求めて	菅野陽樹	菅野陽樹
記号過程の表情原理	小林敏明	江口重幸
〈私〉という虚像	村越 真	下野正俊
語る主体はどこか身体か	大澤真幸	永瀬 唯
技能習得における指導言葉	菅原和孝	
私が私であるために	菅原和孝	
文字に刻印された身体性	菅原和孝	
カッコーの巢のサイボーグ	菅原和孝	
* 巻頭エッセイ	斎藤慎一郎・吉田光演・岡山陽子	
〈往復書簡〉中島平三×西村義樹	中島平三	
生成理論と認知言語学の接点を求めて③	酒井シヅ	
〈疫病と文明④〉近世社会とコレラ	川本皓嗣	
七五調のリズム再論	奥野克巳	
「投稿」ボルネオ島カリスの言語習得	青木直子	
インタヴュー▼言語学フロンティア⑩(日本語教育)	米田正人	
* 連載	原 克	
連載■図説二十世紀末日本人の言語意識⑦	赤堀友美	
連載■都市と近代⑩	蓮見順子	
連載■CMワード・ウォッチング⑫	今泉文子	
リレー連載■言語ジャーナル⑩ネパール	柳原昭二	
リレー連載■読書日記⑤	柳山洋介	
世相語散歩	金森俊樹	
チャレンジコーナー		
口絵■世界の言語⑩アルバニア語		

## 特集 通訳の科学 同時通訳メカニズムの理論と応用

日本における通訳研究(近藤正臣) / 同時通訳と認知言語学(船山仲他) / ヨーロッパの最新通訳理論(水野的) / 通訳理論から外国語教授法へ(三浦信孝) / 英語教育の一環としての通訳訓練(鳥飼玖美子) / 異文化コミュニケーションにおける通訳者(相澤啓一) / 同時通訳の故郷は?(米原万里) / 漢字でがんじがらめ(永田小絵)

